

に刊行された史料に基づき、清代に改訳されたものはとらな
いと凡例にある。正史の音写は清代に改訳されており、この
凡例に矛盾があるが、これは一般に通行している正史を基準
にすることが種々の面で便宜であることからうなづけられ
る。しかし、各項目において、異種の音写について一切ふれ
ていないのは何故か。非漢人の姓名は、元代当時にあつても
種々の漢字に転写されている。例えば、姦臣として名高いサ
ンガについていえば、桑哥・相哥・争哥とある。果していず
れのが広く通行していたか判断できない。ひとつだけを
選択し、その文字以外では当該人物の項を引き出すことがで
きないのは不便である。また、皇帝の名についても、鉄木真
の項には太祖を見よとの指示はあるが、成吉思・忽必列の項
は全くない。即ち非漢人の項については、利用しにくい所が
目立ち、非漢人について特に項を別にした本書の効果を半減
しているのは残念である。

以上いささか欠陥をも述べたが、もとよりそれによつて本
書の価値が減ずるものではなく、今後の元史研究に貢献する
こと大なることを確信する。

(新文豊出版公司、一九七九—一九八二年刊)

黄仁宇著

万曆十五年

佐藤 鍊太郎

一
本書は、Huang, Ray. 1587, *A Year of No Significance*.
(一九八一年、米國エール大学出版)の中国語版である。著
者自身が意識し、中国社会科学院文学研究所の沈玉成氏が
校正潤色したもので、題簽は廖沫沙氏の揮毫である。

初めに著者の研究歴を紹介しよう。黄氏は中国に生まれ、
三十余年前に渡米した。そして、一九五九年以降五年間、ミ
シガン大学で「明代の漕運」をテーマに研究し、博士論文を
完成した。その後、明代の財政税役制度の全貌を窺うべく資
料の収集に努め、『明実録』、奏疏筆記、各地方志、研究書を
読破し、七〇年には『Military Expenditure in Sixteenth-
Century Ming China』《Orkens Extremus》17. を発表
した。また、七二年には英国に渡り、ケンブリッジ大学で、
ジョセフ・ニーダム博士主宰の『中国科学技術史』の編纂に
参画し、七四年には博士と共に *The Nature of Chinese
Society: A Technical Interpretation*. を著わし、その後は
七年来の研究成果として *Taxation and Governmental*

Finance in Sixteenth-Century Ming China. (一九七四年、ケンブリッジ大学出版) を著わした。

以上の研究歴からも判るように、本書は、明代の社会経済制度に關する長年の実証的研究成果をふまえて執筆されている。明末の思想を研究する上で、当時の歴史的社会的背景を知る事が不可欠な以上、本書には明代史研究者のみならず明代思想の研究者にとっても裨益する所があると思われる。そこで、以下、本書の内容を紹介しつつ、印象を述べていくこととした。

二

本書の構成は左の如くで、各章の末尾には詳注が附されている。括弧内は頁である。

自序

(一一六)

第一章 万曆皇帝

(一一四—三)

第二章 首輔申時行

(四四—七五)

第三章 世間已無張居正

(七六—一〇七)

第四章 活着的祖宗

(一〇八—一三三)

第五章 海瑞—古怪的模範官僚

(一三四—一六三)

第六章 戚繼光—孤獨的將領

(一六四—二〇三)

第七章 李贄—自相冲突的哲学家

(二〇四—二四三)

參考書目

(二四四—二五〇)

本書は、右の如く、一般の読者が読み易いようにという配

慮から、伝記形式で書かれている。まず、「自序」に拠って、著者の年来の持論と執筆の動機について紹介しよう。

著者は十六世紀末の全国の田賦額を根拠として、税が重くて民が窮したという明代史の通説について、官僚の汚職や重税で貧富の階層分化が進行したという意味でなら是認できるが、国の税収総額が高過ぎて農民が貧困になったという意味では事実と合致しないという見解をとっている。税が最も重い南直隸蘇州府でも農村収入の約二〇%、他の各府県は一般に一〇%以下であったから、中国の税額は同時期の日本(年貢額は農村収入の約五〇%)、十七世紀末の英国(税収は人口五百万で毎年七百万ポンド、銀二千余万兩相当。人口三十倍の中国の税収総額に匹敵)と比べて決して高くない、というわけである。著者に拠れば、民が困窮した根本原因は、賦税の過重ではなく、法律の腐敗と政府の無能にあり、国家の税率が低いことが地主の搾取と官僚の額外徴税を激化させたという。

また、明朝の施政方針が、太祖以来、たち遅れた農業経済を保護し、商業や金融業の発展を抑制することで経済の均衡状態を保ち、王朝の安全を維持する方針であったために、世界の中で落後してしまった、という見地から、著者は明代の万曆年間に中国の封建経済が已に資本主義経済に向かって進展したという現代中国の学界の通説に反対している。中国の

伝統的政治は、資本主義と違って、商工業を發展させるだけの組織力を持たず、また、個人の富が拡充して抑制し難く、つて王朝の安全に累を及ぼすことを望まなかつたというのである。著者は、明代史の研究者が当時の商工業の進歩と資本主義の萌芽を説明する際によく引用する資料（例えば、張翰『松窗夢語』に見える機織り機購入の話や、王世懋『二酉委談』に見える景德鎮の活況等）を挙げて、それらが因果応報、富貴運命論、風水の話であつて商工業發展の証拠にできないことを指摘している。資本主義経済が萌芽しなかつた最大の原因は、「中国が二千年來、道德を以て法律制度に代へ、それが明代に至つて極まつた」からだ、というのが著者の持論である。

また、著者は、本書で論じている人物がいずれも個人的には不幸な結末に終わった原因について、「このような情況は、断じて個人的原因によつて解釈できることではなく、当時の制度がすでに行きつゝまり、上は天子から下は庶民に至るまで犠牲となつて災禍に遭つたのだ」という見解を示している。

本書は、上記のような見解の妥当性を示すために、万曆時代の代表的人物の具体的事跡に基づいて、当時の中国社会の伝統的・歴史的・思想的背景について説明を試みている。各章の内容を概括すれば、第一章から第四章までは万曆時代前半の朝廷の内部事情、第五章は地方政府の事情、第六章は軍

備事情、第七章は思想界の事情である。以下、各章の具体的内容を紹介しよう。

三

第一章「万曆皇帝」では、『神宗実録』や『国朝献徵録』等を資料として、皇帝の職務、行政機構、儀礼制度、皇帝及び宦官の生活が紹介されており、万曆帝、首輔張居正、太監馮保、帝の生母慈聖太后ら四人の關係に考察が加えられている。とりわけ、帝の師傅を兼ねた張居正が、万曆五年に父の喪に服さなかつたことから物議を醸した奪情事件の経緯が詳細に記されている。ここでは、政治闘争に於ける倫理道德の重要性が指摘されている。この事件が政治闘争に發展した理由について、著者は、倫理道德の力で愚民を教化し、身分秩序、階層秩序を維持しようとする政治に悪影響を及ぼすと考へられたからだと説明している。

著者はまた、張居正が亡くなって二年後の万曆十二年になつて帝が張居正の家を籍没した理由に考察を加へ、帝の人格、心情に留意しつつ、寵妃鄭氏の作用、慈聖太后の干与、張居正に首輔の座を追われた高拱の遺著『病榻遺言』の出現、という三要因を挙げている。これは師であつた張居正の素行に対する帝の幻滅と反動を實証した著者独自の見解である。著者は、皇帝の職務地位を社会の必要に應じて産まれた一機構とみる立場から、どちらかと言えば英明な万曆帝の心

情に対して同情すら示している。著者の示した万曆帝像は、従来の我儘な独裁者、凡庸な君主、稀代の吝嗇漢というイメージとはかなり異なっているが、実像に近いように思われる。

なお、本章には、万曆十四年に帝が王氏（第一皇子常洛の母）を差し置いて鄭氏（第三皇子常洵の母）を皇貴妃に冊封した事件が提示されている。いわゆる皇太子冊立問題の発生である。著者は、この事件が、後の深刻な政治闘争の契機となり、皇帝と官僚との対立を齎し、帝国全体に悪影響を及ぼすことを暗示している。

第二章「首輔申時行」では、『神宗実録』や『張居正書牘』等を資料として、万曆十一年から十九年まで首輔の地位にあった申時行の施政観と張居正のそれとを比較し、また当時の官吏任用制度が紹介されている。とりわけ、万曆十年代前半の官僚人事に関連した朝廷の内部抗争が詳しく紹介されている。

本章には「道德は至高無上で、行政を指導するだけでなく行政に代えられる。……技術上の問題もやはり道德問題と分離できない」「施政の要訣は抽象的方針を主とし、道德を一切の事業の根底とすることに外ならない。朝廷の最大の任務は文官間の相互信頼と和諧を促進することであった」といった著者の持論が屢々示されている。著者に拠れば、文官を弾

圧して独裁的態度をとった張居正と比較して、申時行は調和的な態度で官吏の人心をよく掌握していたという。

なお、本章では、上記の鄭貴妃冊封に廷臣から反対された帝が、万曆十四年秋以降、早朝の朝見を罷め、経筵に出席しなくなった事件が示されている。著者は、この事が道德教化、儀礼制度に及ぼす影響の大きさについて論じ、これに申時行が苦慮したことを指摘している。

第三章「この世にもう張居正はいない」では、『神宗実録』や『武宗実録』等を資料として、皇太子冊立問題を論じている。

万曆十四年に、帝の寵愛していた鄭氏が常洵を出産した為、帝は常洵を皇太子にしたいと考えたが、長子常洛を正統な皇位継承者として擁護する廷臣の反対に会い、果せなかつたので、以後皇帝と官僚が対立することになったという。万曆二十九年に長子が皇太子に冊立された後も、責任をめぐって廷臣内部に抗争が続ぎ、この争いによって、「文官集団は始末のつかない損傷を負った」と著者はみている。皇太子冊立に関して自分の意志を廷臣に拒まれた帝が、その報復として、物質面では人事の昇降、精神面では礼儀の奉行という皇帝の二大職務を終生放棄したため、内外に大量の缺官を生じ、かつ官僚集団内にとりかえしのつかない混乱を生じたというのである。著者は、万曆帝が我意を通しうる立場にあり

ながら、そうしなかつた理由について考察を加え、道德規範の束縛の強さと、それに反撥した帝の心情態度を論じ、正徳帝がきまりきつた皇帝の職権や帝國の制度の改造を試みたのと比較して、消極的な万曆帝にはそのような勇氣や積極性が欠けていたとしている。ともあれ、皇太子冊立問題の發生を境に、帝が政治への熱意を失つたことを重視した著者は、万曆十五年で一線を画している。上記の皇位継承問題の影響は、今後、思想上でも検討されるべき重要課題であると思われる。

第四章「生き続ける祖宗」では、『神宗実録』及び申時行『賜閑堂集』を中心資料として、申時行の眼を通して万曆十一年代の内政外交問題や定陵建築問題を紹介している。

例えば、内政問題では、申時行が黄河の治水、河道修築に潘季馴を任命して治績を挙げたこと、外交問題では、万曆十五年に遼東巡撫がヌルハチ（清の太祖）討伐を主張して失脚した事件で、申時行が内外の文官の協調を重視する立場からそれを小事として見過ごしたことが指摘されている。言及内容は広範で一枚挙しきれない。

四

第五章「海瑞―風変りな模範官僚」では、『海瑞集』等を資料として、南京都察院右都御史の地位に達した海瑞の経歴を辿りつつ、当時の地方政府の行政、司法等の状況を紹介し

ている。

周知の如く、一九五九年に公表された呉晗氏の「論海瑞」に拠つて、海瑞は農民に味方した清官として称揚されたが、一九六五年の文化大革命開始と共に、この海瑞論は農村部の階級闘争から人々の目をそらさせるものとして、また、国防部長を罷免された彭徳懐を弁護するものとして批判されたという経緯がある。しかし、著者が海瑞の章を設けた意図は、これとは関わりなく、『海瑞集』に資料的価値を認めたからであつた。

著者に拠れば、十六世紀の地方政府に関する資料は少なく、沈榜『宛署雜記』に載っているのは京師の情況であつて一般概況ではなく、顧炎武『天下郡国利病書』は瑣碎に過ぎ、唐鶴徴の南直隸についての叙述、帰有光の浙江長興県の叙述も不完全であり、これらと比較して『海瑞集』は当時の地方政府の各方面に言及して、当時の情況を具体的に理解する上で最も参考に値するといふ。

なお、本章では、海瑞が立派な官僚だと思われていながら屢々排折された理由や、海瑞のやり方が文官全体の準則とされえなかつた理由等に考察が加えられ、個人道德の長所が、司法、行政の組織上、技術上の欠点を補いえないことが論証されている。

第六章「戚繼光―孤独な將軍」では、戚繼光の遺著『紀效

新書』、『練兵実記』、『止止堂集』等を資料として、薊州総兵官に至るまでの戚繼光の経歴を中心に、当時の武官の地位、兵制、戦術、軍備が紹介されている。

本章では、文官が統治する農業国家に在っては、武官が軍事的効率を強調し、兵器や戦術等の技術の発展を提唱し、文官と肩を並べるようにすることは不可能であったということ論証している。抗倭戦争中功績第一の戚繼光は、この環境に適應してその天才的統率力を發揮しえたという。

なお、海瑞と戚繼光に共通していることは、万曆十五年に失意の内に亡くなったことである。著者は二人の失意の死を以て時代の象徴としているように思える。

五

第七章 「李贄—自己矛盾した哲学者」では、『焚書』や『咸書』等を資料として、李贄の思想が紹介されている。著者は、李贄の遺著にみえる苦悩と矛盾に時代象徴性を認め、彼の遺著が、当時の思想界の苦悶の深さを推測する上で助けとなると述べ、更には「孔孟思想の影響、朱熹と王陽明の是非長短は李贄の分析弁論によって一層明白となり、万曆皇帝、張居正、申時行、海瑞、戚繼光の場合も、彼らの生活と理想もまた、李贄の著作があるために、我々には別の角度から観察する機会がある」と総括して、その重要性を正当に評価している。

本章には、李贄の思想に関する著者独自の見解が随所に示されているので、それを中心に内容を紹介しよう。

まず、李贄の自殺を真理の爲の自己犠牲とみる従来の説については、著作中に自己犠牲による自己満足が見いだせないとして疑問を示している。また、李贄が下層民衆の立場に立つて、農民を搾取する地主階級を批判したという通説については、彼が地主階級の朋友に頼って生活を維持していたことをふまえて、「もし、ある所で地主官僚である友人を批判しているとしても、それは個人の品性に着目しているだけであって、少しも経済的立場を提示することは無かった」と否定している。

また、万曆十六年の李贄の剃髮については、「これは一般の意味での遁世と異なる。理智の上でも社会関係の上でも、彼の以後の言行は、事実上全国の文人の良心を代表した」と述べ、剃髮の原因について、伝統的な家族觀念や社会慣例と関連させて考察を加え、彼が逃れようとした束縛の例を具体的に示している。

李贄と親友の耿定理との関係については、両者の思想を比較的一致しているとみる従来の説を否定し、耿定理の無我主義、理想主義と現実に関心を持つ李贄の思想とは「水火の若く分れている」としている。両者の仲が良かった理由は、「耿定理の學術理論上の弾力」によるものではなく、耿定理がそ

の柔和な性格によって、「常に禪宗式の機鋒で弁論中の正面衝突を避けた」からだとしている。

李贄が『焚書』の中で批判したことでは有名な耿定向については、「已に倫理道德の理は物理地理の理と区別があり、このため施政の基準もまた哲学思想と違いくちがある」ということを指摘し始めていた。このような理論は当時の一元論的宇宙観を支持する者に受け入れられなかった」と述べて高く評価している。彼が李贄と論争した原因は、「両者がいずれも自己の理論を行動の中に体现する準備をしていたからだ」としている。更に、両者の論争は人の性の善悪に基づいているので「中国哲学史の中から全面的解答を探す必要がある」として、孔子、孟子から朱子、王陽明に至る儒家の学説を概観しつつ考察を加え、王畿と王良の李贄への影響を論じている。その際、王良が王陽明の学説を推し広げて群衆運動としたという従来の説については、「明代社会では、哲学で群衆運動を指導した可能性は決して存在しない」と否定し、ただ王良の影響の下で李贄が物質、功利を重視し、形而上学の拘束を脱して日用の常識を基礎としたことを認めている。

さて、李贄と耿定向が論争した原因は、中国の学界では両者の経済的地位の違いに帰されるのが普通であった。もっとも具体的に言えば、耿定向の思想を大地主、大官僚の保守反動思想とし、李贄のそれを中小地主ないし下層民衆の立場に立

つ反伝統的革新思想として、経済的見地から安易にレッテルを貼り、両者の思想を截然と区別するのが通説であった。著者の見解はこれを否定したものであり、卓見というべきであろう。

李贄の歴史観については、『蔵書』を資料として紹介しており、その功利的君臣評価については、「このような小節を捨てて大局を見るやり方は正しいと考えられる。その前提は公衆の利益を目的とすることである。論理的に解すれば、公衆道德は個人道德と異なっており、目的が純正ならば手段が不純であってもかまわない」と評価し、李贄の見解がマキアヴェリのそれと類似していることを指摘している。

著者はまた、李贄が根本から倫理道德を基準とする歴史観を放棄できなかったために自己矛盾した評論をなしたと指摘し、著作については、「その着眼点は読書人の私的利益と公衆道德とを融合させることにあった」「公私衝突の中に調和する方法はありえないのか、彼はまだ正しい解答を出してはいないとしても、少なくとも既にこの問題を提出している」と指摘している。

卑見に抛れば、『蔵書』では、個人道德以上に政治上の能力を高く評価しており、この点で個人道德と政治倫理とが区別されかけていると思われる。従って著者の上記の指摘は首肯しうるものである。

なお、本章には、耿定力を耿定理と混同したり（注七四）、『蔵書』に関する「万世治平の書云々」という評語を『焚書』に関するものとして引用する（二三二頁）等、若干の誤りが見受けられるが、いずれも論旨には影響のないものである。

六

上記の如く、本書が我々に提示したのは、倫理道德が政治の支配原理であったことから生じた個人の苦悩と悲劇であり、社会の矛盾であった。本書に於いて著者が、各人の行動が儒家の道德規範によって制限されていたため、法律制度を改造する創造性や国家社会を發展させる技術が官僚集団に欠如し、社会の混乱を招いたという持論を繰り返して述べている所以である。

本書は、万曆十五年という歴史の斬新な断面を描いた好著である。とりわけ、政治史に於ける皇太子冊立問題の重大性を明示したことは、この問題が思想史に於いても検討されねばならない重要課題であることを示している。また、時代思潮を代表する李贄が、個人道德と公衆倫理との調和に苦悩していたことを指摘している点も高く評価できる。本書に示されている多くの独自の見解は、中国の学界にとって刺激となるものである。ただ、中国の読者向けのせい、日本での研究には言及していない点が惜しまれる。しかし、本書の長所

は新しい歴史事実を發掘し、それに関する独自の観点を提示している点であるから、日本の研究者にとっても一読に値するものである。表面上は記すべき事も無いような万曆十五年という年に、大明帝国の發展の限界を看取した著者の見識に敬意を表して、本書の紹介を終わりたい。

（中華書局、一九八二年五月刊、A5判、二五六頁）

寧夏哲学社会科学研究所編

清代中国伊斯蘭教論集

中田 吉信

中国のイスラム学界は、久しく沈黙を守っていたが、近年漸く研究活動が開始されたようで、その成果が順次發表され始めた。一九七八年一〇月に『回族簡史』（銀川、寧夏人民出版社、一一六頁）が發行され、一九八二年一月には『撒拉族簡史』（西寧、青海人民出版社、一〇二頁）も出版された。『中国穆斯林』という季刊雑誌も一九八一年後半から刊行されているようである。ここに紹介する『清代中国伊斯蘭教論集』も、こういう一連の研究成果のひとつで、注目に値する論文集と思われる。